

(2020年10月2日／大阪工業大学梅田キャンパス 常翔ホール)

関西・大阪21世紀協会は、日本万国博覧会記念基金*による助成事業を広く知っていただくため、2018年より、国内外の助成先を一堂に集めた助成金贈呈式と事例発表会を実施しています。しかし、2020年度はコロナ禍の影響により贈呈式を中止。2021年度の助成事業募集説明会と併せ、2019年度の助成先3団体の事例発表会を開催しました。当日は、日本各地から当助成事業への申請を検討している事業者の方々など80名が来場し、3団体の発表にも興味深く耳を傾けました。ここでは、その団体の活動についてご紹介します。

*日本万国博覧会記念基金(EXPO'70 基金)
1970年に大阪で開催された日本万国博覧会の収益金の一部を元に創設。当協会は、2014年に独立行政法人日本万国博覧会記念機構から基金を継承・管理し、その運用益を国際相互理解の促進に資する活動や文化的活動に助成しています。

「平和と美術と音楽と」 Peace Art Project in ひろしま実行委員会

アートを通して平和を発信 夢や希望を感じてもらうのが広島役割

広島から世界に向けて平和を願い、アーティストが連携して夢や希望、癒やし、祈りの心を発信する「平和と美術と音楽と」(Peace Art Project in ひろしま実行委員会)。2017年に第1回が開催されて以来、原発事故で放射能被害を受けた福島県やウクライナと、原爆が投下された広島県、長崎県で「アート」を通じた交流を深めてきました。

2018年4月には、広島の演奏者とアーティストとともに「被爆ヴァイオリン」を携えてフランス(パリ)でのサロン・コンサートや、ウクライナ(キエフ・スラブチチ)での「チェルノブイリ追悼イベント・コンサート」に参加。「ヒロシマ」「ナガサキ」からの訪問が現地で大きな反響を呼び、感動的な交流が地元メディアで報道されました。また、8月には被爆建物の旧日本銀行広島支店でコンサートの開催や長崎平和音楽祭への参加など、同年度で23か国・5700人が参加しました。

2019年には、被爆建物の旧日本銀行広島支店で被爆ヴァイオリンと被爆ピアノのコンサートや、子どもたちによる被爆樹木で作ったパンフルートの演奏、キッズゲルニカ(ピカソの『ゲルニカ』と同サイズのキャンバスに描く平和の絵)など、さまざまなアートパフォーマンスが披露されました。また、サブイベントとして、アメリカでインディアンのホピ族の人たちと交流し、現地で演奏が行われました。ホピ族の住む地域からは、1945年にニューメキシコ州で行われた人類最初の核実験に使用されたウランが採掘され、それに従事したホピ族の多くが被曝(ひばく)しました。8月6日の原爆慰霊祭にホピ族の人たちが広島に来て祈りを捧げてくれたこともあり、以来、核の犠牲者の遺族を持つ者同士として交流し、平和への想いを共有しています。EXPO'70基金の助成金は、これらのイベント運営に役立てられました。

被爆75周年を迎えた2020年は、広島市の助成金(広島市文化芸術の灯を消さないプロジェクト)を得て、インターネットで実施。広島とニューヨークを拠点に、ヨーロッパ各

国やパレスチナ、ルワンダ、ニュージーランドなど、世界14か国(17都市)から送られた44本の動画を、8月6日から翌7日にかけて24時間YouTubeで配信しました。



中川圭子さん(事例発表会にて)

事例発表会では、実行委員会代表の中川圭子さん(NPO法人Heart of Peaceひろしま代表理事)が、「75年間は草木も生えないといわれた広島が、2020年、ついに被爆後75年目を迎えました。今、広島には緑が溢れ、まちには子ども達の歓声が響いています。この復興は、日々懸命にまちを育ててくださった先輩方の努力と、世界中の人々が広島に想いを寄せ、祈りの気持ちを向けてくださったおかげ。平和とは、一人ひとりが心の中に平和を感じるのだと思います」と挨拶。続いて、ヴァイオリニストの佐久間聡一さん(広島交響楽団第一コンサートマスター)による被爆ヴァイオリンの演奏が披露されました。

このヴァイオリンは、戦前、広島女学院のロシア人音楽教師だったセルゲイ・パルチコフさんの所有物で、爆心地から2.5kmの地で被爆し、2014年に修復されたもの。後年、同氏の祖父がウクライナ・キエフの出身で、ヴァイオリンは当地で作られたものだと分かりました。佐久間さんは、「これを弾くと、75年前に大切にこの楽器を持っていた方と、その方の演奏を聴いて感動した方がおられたことを思う。その独特の音色を味わって聴いていただきたい」と述べ、『タイスの瞑想曲』と『ラルゴ』が奏でられると、会場が優しく温かな雰囲気になりました。

中川さんの母親は入市被爆者(原爆投下直後に爆心地近くに入り、残留放射線の影響を受けた人)でしたが、自分が被爆していることを公にせず結婚し、子どもの結婚にも影響

があると思います。言えなかったそうです。当時は被爆者に対する強い差別や偏見があったからです。そのため中川さんも結婚するまで被爆2世であることは知らされず、出産後しばらくして、夫婦お互いが被爆2世だと分かったのです。

そんな中川さんが子どもの頃、毎年8月6日になると叔母に連れられて広島平和記念式典に行くのが恒例でした。しかし、そこで核廃絶や戦争反対を訴える人たちのシュプレヒコールやデモ行進を目にするのが嫌で、子ども心に「どうしてみんなハチロク(原爆の日)を静かに迎えることができないのだろう」と思っていたそうです。その日は多くの人の命日で、中川さんの祖父も被爆して行方がわからないままだったからです。

その思いは大人になっても変わりませんでした。また、8月6日が近づくとうる世界から人が来て、平和を訴えるさまざまなイベントが行われるのですが、そうした「お祭り」のような状態に広島市民が慣れてしまい、自分たちのまちのことなのに無関心な人が多いことにも違和感を持つようになりました。そこで、そういう「運動」とは違う形で、広島から平和を発信できないかと思っていたときに出会ったのが「音楽」でした。



中川さんは、2016年に東日本大震災の復興支援を行うNPO法人「Heart of Peace ひろしま」を設立しました。きっかけは、2011年11月に開催された東北チャリティーコンサート(世界平和記念聖堂／広島市)で、東日本大震災の犠牲者への慰霊を込めた被爆ピアノでの演奏とその場での観客の祈りに、衝撃を受けたことでした。東北に向けられたわずか3分間ほどの黙祷が、音楽が加わることで劇的な静寂と感動の空気に包まれたのです。「音楽は国も言葉も超え、感動を通して



被爆ヴァイオリンで演奏する佐久間聡一さん(事例発表会にて)

心をひとつにする」と確信した瞬間でした。

中川さんは、「広島は被爆後75年を過ぎ、今は世界に希望と夢を、そして真の平和を発信することのできる場所になっています。これからは日本の文化、スピリットを世界に発信する時が来ていると思います」と、力を込めて語りました。

▼「平和と美術と音楽と 2019」実施のようす



広島市立千田小学校児童によるパンフルート演奏
(旧日本銀行広島支店／2019年8月4日～6日)



キッズゲルニカ制作後の記念写真
(なぎさ公園小学校)



ホビ族居留地での交流会
(アメリカ・アリゾナ／2020年2月25日)

「ビヨンドトゥモロー アジアサマープログラム 2019」 一般財団法人 教育支援グローバル基金

「逆境は優れたリーダーを創る」を理念に 困難を経験した若者の成長を応援

日本には、親との死別・離別を経験したり、虐待やネグレクトから保護されて児童養護施設や里親のもとで暮らしていたり、貧困家庭で暮らしてきた若者が多くいます。教育支援グローバル基金（橋本大二郎代表理事／元高知県知事）は、そうした困難を経験した高校生・大学生を対象に、進学のための奨学金給付や国内外での人材育成プログラムを実施。彼らが経験した逆境は人への共感力を育む重要な資質であると位置付け、広い視点と深い共感力を持って活躍できる人材輩出を目指しています。

「ビヨンドトゥモロー アジアサマープログラム」は、そうした人材育成プログラムの一つです。2019年度は、9月に奨学生の中から8名の大学生がタイを訪問。バンコクの日本大使館や国連機関でアジアの経済成長について話を聞き、現地のNPOの案内で、経済成長の裏で取り残されたスラム街の実情を視察しました。また、山岳少数民族・モン族の村を訪問し、3年前に電気が通ったばかりの村でホームステイ。同じ年頃の若者のニーズを聞いたり、経済成長とは異なる世界での生活様式を体験したりしました。さらにシンガポールとインドネシアにも行き、タイでのフィールドワークを日本大使館や企業にて英語で発表し、意見交換を行いました。

坪内南さん



ホームステイ先のタイ・モン族の若者たちと一緒に
(写真提供：一般財団法人教育支援グローバル基金)

事例発表会で同基金の坪内南さん（マネージングディレクター）は、「昔に比べて海外留学がしやすくなったとはいえ、経済的理由でそれができない若者が日本にも世界にもたくさんいる。世界の調和的な発展と寛容な社会を実現するためには、そうした若者がチャンスを得ることは非常に重要なこと」と呼びかけました。また、参加学生の前橋亮介さん（広島大学教育学部）は「世界には自分が知らない職業が満ち溢れていること、自分が想像する以上に過酷な生活をしている人がいること、幸せは身近なところにあることを知った。これらの気づきを踏まえて幅広く学びを深め、夢を追いかけていきます」と語りました。

「2019 オーストリア・ポーランド雅楽公演」 公益社団法人 北之台雅楽アンサンブル

両国の長きにわたる友好を 世界最古のオーケストラが祝福

千数百年の歴史を持ち、「世界最古のオーケストラ」と呼ばれる伝統芸能「雅楽」。北之台雅楽アンサンブル（千葉県いすみ市）は、その演奏を通して数多くの国際文化交流を行っています。とくに国家間の修好記念年の機会に、外務省の招聘のもと、日本政府主催公演を世界各地で開催。2019年は、日本・ポーランド国交樹立100周年および日本・オーストリア修好150周年の節目の年にあたり、「100年、150年より1000年へー 雅楽千年のオーケストラによる祝賀」と銘打ち、両国の友好発展を願ってオーストリアとポーランドで雅楽公演を開催しました。

現地での滞在は7月2日～11日。公演初日の3日は、オーストリア・リンツ市の由緒あるシュテイレグ城で開催しました。公演後のレセプションでは来場者にお茶がたてられ、大変喜ばれました。5日にはウィーンの世界博物館で実施。小井沼紀芳在オーストリア日本国特命全権大使、世界博物館シッケルグラーバー館長、喫日協会レオポルド会長も来場し、日本・オーストリア修好150周年を祝いました。7日には、ウィーンから約500kmの長距離を大型バスで半日かけて移動し、ポーランドの古都・クラクフへ。浮世絵収集家として著名なフェリックス・マンガ・ヤシェンスキ（1861～

井口峰子さん



ウィーンの世界博物館での演目「舞楽・北庭楽（ほくていらく）」を披露
(事例発表会にて)

1929年)のコレクションを所蔵する日本美術技術マンガ博物館で、当館初の雅楽公演を行いました。最終公演日の9日には、首都ワルシャワにあるアジア太平洋博物館で「浦安の舞」を披露。この演目は、昭和天皇が詠まれた世界平和を祈る歌「天地の神にぞ祈る 朝なぎの 海のごとくに 波立たぬ世を」をもとに創作されたものです。ポーランドは戦争で他国の侵略を受けた不遇の歴史があり、平和を願う力強い舞に涙する人もいました。

事例発表会でこれらを説明した井口峰子さん（北之台雅楽アンサンブル副理事長）は、「千年の歴史を持つ雅楽を紹介させていただくことで、異なる文化の理解、新たな国際親善につながることを実感した」と振り返りました。

2020
年度

2020年度 助成先の事業紹介

今年度助成が決定した50事業の中より、事業者から寄せられた報告をご紹介します。

芸術資源研究センター重点研究プロジェクト —バシェ音響彫刻 特別企画展—

事業者：公立大学法人 京都市立芸術大学

交付決定額：140万円

実施期間：2020年11月7日～12月20日

実施場所：ギャラリーアークア

1970年大阪万博において、鉄鋼館（現・EXPO'70パビリオン）ホワイエに展示された17基のバシェの音響彫刻のうち、これまでに修復された6基中5基が京都に集い、修復過程のアーカイブなどを展示するとともに、毎週末には音響彫刻を用いたイベントが行われました。2013～2017年にかけて修復された5基の音響彫刻は、普段は万博記念公園、京都市立芸術大学、東京藝術大学に分かれて保存されているため、今回の企画展のために分解し、会場までトラックで搬送されてきた部材を元の姿に組み立てる、という大仕事からのスタートでした。7回のコンサート、3回のワークショップ、そしてパレット・ソノール（バシェの教育音具）の体験コーナーの人氣も高く、会期中3,128名の来館者で賑わいました。また、オンライン開催となった国際シンポジウムも、フランス、スペイン、カナダ、日本からバシェ研究者たちが参加し、それぞれの活動報告や今後の展望について、有意義な意見交換がなされました。



展示風景 © Takeru Koroda

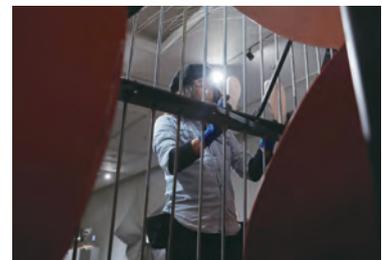
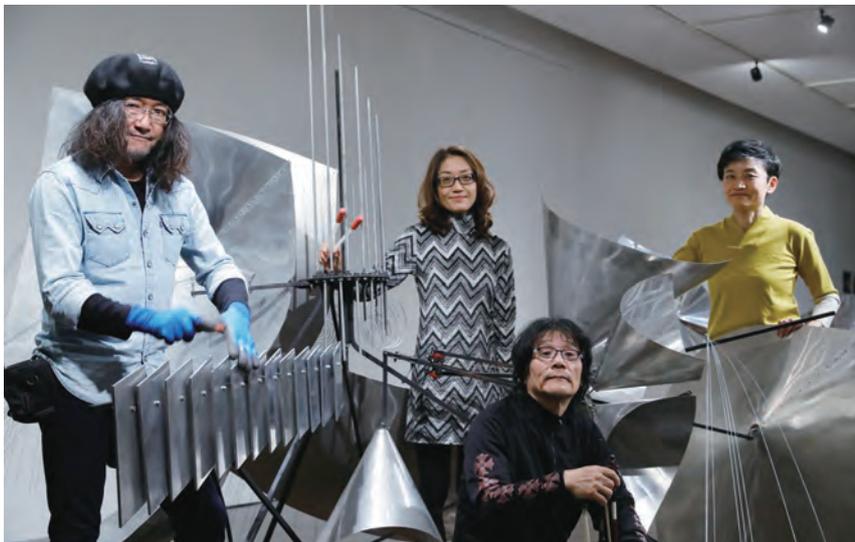
万博というユニバーサルな場で作られたバシェの音響彫刻を、貴重な芸術資源として多くの人々に知らしめ、その多彩な響きを後世に伝え継いでいくことは、万博記念基金から助成を受けた私たちの大事な使命でもあり、また大きな喜びでもあります。コロナ禍の狭間で会期を全うできたことは誠に幸運でした。

（企画代表者：岡田加津子 京都市立芸術大学教授）

*バシェの音響彫刻…フランス・パリを拠点に活動していた音響技術者のベルナール・バシェ（1917～2015年）と彫刻家のフランソワ・バシェ（1920～2014年）の兄弟によって考案された音の鳴るオブジェ。

▼バシェ音響彫刻の演奏（アンサンブル・ソノーラ）

アンサンブル・ソノーラ（左から渡辺亮さん、岡田加津子さん、沢田穰治さん、北村千絵さん）



渡辺亮さん



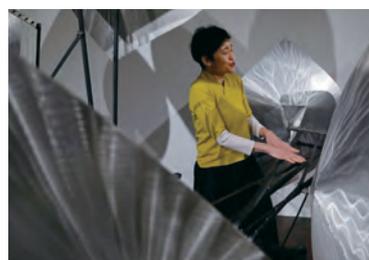
岡田加津子さん

▼ワークショップ

バシェの教育音具を用いた、子どものためのサウンド・ワークショップ



© N.U.I.project



北村千絵さん



沢田穰治さん

©Takeru Koroda